1965 年ドミニカ共和国侵攻時における米国平和部隊
―ソフトパワーとしての政府系ボランティア組織の位置付け―

河内久実子（横浜国立大学）

ジョン・F・ケネディ政権にとって、対ラテンアメリカ政策は、外交上の急務と捉えられた。ケネディは大統領選後、ラテンアメリカ地域に関するタスクフォースを立ち上げ、1961 年 8 月「進歩のための同盟」を開始した。その背景には、米国の覇権的な支配が長らく続いたキューバで革命が成功し、これまで「米国の裏庭」としてソビエト連邦の勢力が及ばないとされていたラテンアメリカ地域の共産化に、米国政府が危機感を募らせたことに関連する（上村 2019：290-294）。

平和部隊は、冷戦下、世界のイデオロギーが二極化するなかで、ソフトパワーを強化し、米国の価値観を普及する役割を、米国政府から期待されていた。平和部隊のボランティア（以下、隊員）k は、農村部や都市スラムなど広範囲に派遣され、現地で暮らし、主に住民を対象とした協力活動を行うことで、お互いの理解と信頼関係を構築し、現地の人々が米国社会に対する理解を深める役目を期待された。そのため、隊員派遣によって、米国のソフトパワー普及を果たすためには、スピーディーに多数の隊員を多くの地域へと派遣することが重要であった。このような背景から、米国平和部隊は 1960 年代、ラテンアメリカ地域への隊員の大量派遣を行なった。

冷戦下の米国政府にとって「第二のキューバ」と危惧されたドミニカ共和国への派遣は、平和部隊が創設された翌年の 1962 年に開始された。平和部隊は、プログラム開始早々、1963 年、1965 年と 2 度にわたるクーデターを経験した。特に 1965 年には反政府軍鎮圧に向け、米国の海兵隊がドミニカ共和国への侵攻を決行し、戦火の中で隊員たちは活動した。米国が侵攻し駐留した任国（host country）で活動を続けた平和部隊事務所や隊員は、米国内で注目や賞賛を集めた。この特異な事例を対象とし、本研究では、米国政府、平和部隊事務所、および隊員個人というそれぞれのアクターが、米国のドミニカ共和国侵攻と彼らの置かれた状況をどのように受け止めていたのか、上記の３つのアクターの視点を文献資料や公文書や隊員の個人記録を用いて明らかにする。

参考文献：

上村直樹、2019、『アメリカ外交と革命―米国自由主義とボリビアの革命的ナショナリズム　挑戦、1943 年～1964 年』、有信堂高文社。

La Caravana de hondureños en busca del sueño americano y la nueva política migratoria Biden – Castro

Alejandra María González　(Universidad Chukyo)

El flujo masivo migratorio irregular de centroamericanos procedentes del Triángulo Norte (Guatemala, Honduras y El Salvador) hacia Estados Unidos en busca de una mejor vida ha conmovido al mundo entero. Mejor conocida como "La Caravana", este flujo migratorio irregular ha sido solamente la punta del iceberg que ha dado a conocer a nivel internacional las serias condiciones de pobreza e inseguridad a las que están sometidos los habitantes de la región.

La ponencia se enfoca en la caravana de hondureños. Presenta las causas de la caravana y dará a conocer el plan migratorio actual entre los gobiernos de Joe Biden y la presidenta de Honduras, Xiomara Castro.

Primero, se hará un análisis de cómo el narcotráfico y la corrupción en Honduras han creado situaciones precarias, especialmente para los más pobres, obligándolos a dejar sus hogares en busca de condiciones más humanas para vivir. Honduras ha sido catalogado como un estado narco. El gobierno anterior pudo permanecer en el poder durante 12 años debido al patrocinio de carteles de la droga (red a nivel internacional). El plan actual del gobierno de Biden es de dar lucha contra el narcotráfico en el Triángulo Norte. La lucha contra el narcotráfico significaría erradicar la inseguridad, garantizar los derechos humanos básicos y así crear más oportunidades de educación y trabajo para los hondureños. Ello crearía una disuasión en el anhelo de migrar hacia el norte y por tanto reducir la migración irregular a Estados Unidos.

El plan de la lucha contra el narcotráfico está en curso. La lucha ha sido notoriamente más diligente con el gobierno de Biden y el gobierno de Castro. El expresidente hondureño, quien permaneció en el gobierno por más de una década, ha sido calificado por las autoridades fiscales del estado de Nueva York como un significativo promotor del narcotráfico. Fue pedido en extradición por los Estados Unidos y, en marzo del 2022, se concedió la extradición por parte de las autoridades hondureñas. La ponencia dará una reseña de este recorrido e identificará la relación lógica entre el narcotráfico y la caravana.

La ponencia luego analizará la actual política migratoria Biden – Castro. Esta nueva política migratoria se centra en mejorar las condiciones económicas y sociales en los países del Triángulo Norte y mayor cooperación de parte de los Estados Unidos para mejorar y controlar la migración irregular.

ウルグアイにおけるファシズムの浸透とラテンアメリカ主義思想形成
―戦時期南米南部における政治外交史の一側面―

中沢知史（立命館大学）

世界的に民主主義の危機が叫ばれるなか、近年、権威主義やポピュリズム、極右運動の研究が盛んに行われている。ラテンアメリカについても、ブラジルにおけるボルソナーロ政権登場などを背景に、右派、保守派、反動主義に対する関心が高まりつつある。しかし、欧米の事例に比して研究の蓄積はいまだ薄い状況にある。

上記の問題意識のもと、本発表では、2019 年総選挙で左派から右派への政権交代が起きたウルグアイの事例を取り上げる。19 年選挙の特徴は、左右がほぼ拮抗するなか、元陸軍総司令官ギド・マニーニ・リオスを指導者とする極右勢力がアウトサイダーとして登場し、右派連合に加わって決選投票でキャスティングボートを握った点にある。これら勢力は一過性のものでなく、20 世紀以降のウルグアイ政治史のなかに確固たる地位を占めており、強いレジリエンスを有しながら今日に至っているのではないか。

本発表では、第二次世界大戦前後、特に 1930～40 年代のウルグアイ政治外交における右派、保守派、反動勢力の動向を取り上げる。同時期のウルグアイは、世界恐慌と欧州ファシズムの影響を背景として、二度のクーデターが生じるなど、20 世紀初頭の改革で達成された政治秩序の崩壊と再編成を経験した。また国際政治面では、大英帝国から米国へのヘゲモニー転換の途上にある時期でもあり、さらに、隣接する大国がそれぞれ異なった戦時への対処方針をとるなか、対外関係上強い緊張状態に置かれた。内外の秩序が流動化し混沌とした情勢のなか、ガブリエル・テラ、ペドロ・マニーニ・リオス、ルイス・アルベルト・デ・エレーラといった人物達に代表される勢力はどのように動いたのか。コロナ禍で史資料へのアクセスに制約がかる状況下ではあるが、能う限りで収集したウルグアイ、米国、英国、日本の公文書等を使用して描き出してみたい。戦時期南米南部における政治外交史の一側面が明らかになることで、戦後の 1950～60 年代に現れ、現在でも左右のウルグアイ政治家たちの言説に見出せるラテンアメリカ主義思想の形成過程と思想の特質についても示唆が得られるであろう。

（本発表は、科研費「ラテンアメリカ地域における保守・反動の系譜学―ウルグアイを事例として―」（2022～25 年度）の一部である。）